



入職のご挨拶

おく の しげ こ
奥野 滋子 医師

専門 麻酔・ペインクリニック・緩和ケア
在宅(緩和)医療
資格 日本麻酔科学会指導医
日本ペインクリニック学会専門医

高校時代、私は某病院で暗い表情の若い女性に出会いました。目の前で彼女の顔からガーゼがはらりと落ち、赤黒くえぐれた傷が見えました。「どんなに悲しいだろう」。その後偶然再会した彼女は、多少違和感はあるもののきれいに化粧をして仲間と楽しそうに話していました。形成再建外科手術後でした。「医療

には人生を変える力がある」と感動した私は、建築家への夢を捨て医学を志すことにしました。大学卒業後は迷わず形成再建外科に入局し2年間修業を積みました。その間、がん、熱傷、先天奇形、外傷などで多くの方を看取り、誰も「死」は避けられないという事実を突き付けられました。

形成外科医時代、ある高齢の男性と出会いました。彼は妻を裏切り浮気相手と長く生活していたのですが、ある時自分の不義理を恥じ妻のもとに戻りました。しかし妻はその時末期の胃がんで、痛みと吐き気に苦しんでいました。彼は妻の不調に気付かず病院にも連れて行かなかった自分を責め続けました。彼は献身的に介護し看取りました。妻の死後、自分もがんになり、痛みがひどくて食事も睡眠も妨げられていました。何とか痛みが取れないものだろうか。私は鎮痛薬を勧めました。しかし彼は「うるさい、帰れ。薬は要らん」と怒ります。どうしてそんなに薬を拒むのか？その理由に私は愕然としました。「お前たち医療者は痛いと言ったら痛み止め、気持ちが悪いと言ったら吐き気止め。薬・薬…。人の苦しみは薬なんかじゃ取れないんだよ。わしは妻と同じ痛みを自分の身に受け



ることで妻に許されたいと思っている。痛みはわしにとっては生きがいなんだ。」

痛みは身体的、精神的、社会的要素、スピリチュアリティが複雑に絡み合い、人の生き方も変えてしまうほどの苦しみのだということ、薬だけでは緩和できないことを彼に学びました。

現在の私の専門は、麻酔・ペインクリニック(痛みの治療)、緩和ケアです。専門性を活かしながら、在宅医療・在宅緩和ケアにも関わっています。

鷲田清一氏は『老いの空白』で、「営み」を通してなりたつ共同体は仕事を軸としているために、まず「生産性」「効率性」「有用性」というものが評価の基準となり、それとの関連で意味づけや合理化が問われ、営みに関与しないことは「無駄」「無意味」「無用」としか描かれなくて語っています。今、私たちは「老いる」ということをますますネガティブなものとして意識してしまっています。今後は、価値基準を軸として構成され高度な経済成長を遂げてきた日本社会を、偏見のない横並びの共同体社会へと変えていかなければなら



ないでしょう。そのためには、「何もできなくても、あなたはそこにいてくれるだけでいい」といえるような、相互の「補完」「許容」を軸とした物差しが必要なのだと思います。もっと自信をもって高齢者が生きられる社会、子供から高齢者に至るまで、みんなが安心して住み慣れた場所で過ごし旅立てるお手伝いができれば幸いです。私はこれから日本が迎える「高齢多死社会」に向けて誰一人「看取り難民」にしたくないと考えています。

かかりつけ医として、いつでも気軽にご相談ください。どうぞよろしくお願いいたします。



奥野医師の 診察日

毎週月曜日 / 午後 (受付時間 11:30~16:30)

● 内科・訪問診療初診 ※予約制ではありません。